

大学

情報化社会と記憶術

文学部英文学科助教

円浄えんじよう
ゆり

日本社会が情報化社会と呼ばれるようになって久しく、私たちの身の回りには多くの情報が溢れています。総務省のデータによると、モバイル端末を保有する世帯は、2021年時点で97パーセントに達したそうです（令和4年情報通信に関する現状報告）より）。コロナ禍以降、ビジネスや教育現場で、情報通信技術（ICT）の活用が積極的に行われ、子供から大人まで、幅広い世代でモバイル端末を使用する機会が増えました。大学ではオンライン授業の実施体制が整備され、学生がスマートフォンを用いて授業動画を閲覧したり、レポート課題をオンライン上に提出したりすることが当たり前となりました。その一方で、いわゆる「スマホ依存」や「スマホ脳疲労」といった、モバイル端末の長時間利用による弊害も意識されるようになり、特にソーシャル・メディアを介して受け取る情報量の多さをストレスに感じる人が増加しています。情報通信技術の利用が日常生活に浸透し、パソコンやスマートフォン無し

の生活が難しくなってきた今こそ、溢れ出る情報に対して、賢く向き合い、対処する技術が必要です。

私は16・17世紀の英文学研究者として、人文主義学者のエラスムスが提唱した記憶術が、情報化社会において見直されるべきだと考えています。エラスムスは*De Copia*の中で、読書の際に記憶すべき情報を見かけたら、その情報を抜き出し、項目ごとに並び替えた上で暗記するようなアドバイスをしています。エラスムスの考えでは、この作業を繰り返すことで、頭の中に、ページの尽きない仮想ノートを作り上げることが可能で、学習者は記憶の中の仮想ノートを参照することで、記憶情報にいつでもアクセスできる状態となります。

ルネサンス期の記憶術から私たちが学べることは、パソコンのない時代にも、情報を体系化して保存するという整理術が存在しており、時代が移り変わっても、人間の性質は変わらないということです。そして、情報化社会を生きる私たちにこそ、情報に溺れぬよう、自己の価値観で情報を整理し記憶する、人文主義的情報管理が必要なのではないでしょうか。

女子大学

共同体というケアの在り方

学芸学部音楽学科准教授

北脇 歩
きたわき あゆむ

二十代後半、ある強い想いを胸に抱き、単身アメリカへ渡った。計十四年過ごしたのだが、帰国までの十年ほどは、現地で訪問ホスピススタッフとして奉仕の機会が与えられた。これはそこでの気づきの話である。

「なぜアメリカにまで来て、この分野の仕事を望むのか。」採用面接での最初の質問である。死別による深い悲しみが全ての動機であり、終末期ケアの学びと実践経験を積むための渡米であり、帰国後母国でケアを求められる人を支えられる自身の成長を強く願っているからだ、と真摯に伝えた。採用の返事を頂いた際、その理由の一つとして、私の想いと共鳴する、ある感覚が決めたかったようだ。

私を含むそこで働くスタッフの九割以上が、元は別の医療領域、または全く異なる業種であったが、個々の死別体験、その際受けたケアへの感謝の気持ちが大きな転機となり、新たに終末期ケアについて学びを深め、それぞれの資格を取り、皆このチームに加わることを望んだのだ。自身

の体験が生む共感、言い換えれば『自分事感覚』がこの『共同体』を形成していた。しかし、この『共同体』はスタッフ間だけのものではなく、スタッフの大半がかつては患者の家族であったように、患者や家族との関係性もまた『共同体』である。残念ながら我々は、患者本人の気持ちに本当の意味で共感できないのだ。しかし、人の数だけ存在する人生の物語を通し、苦しみや喜びを互いに受け止め、支え合い、成長し合う『共同体』には成れる。

ある患者は戦争体験の苦しみを誰にも言えず長年苦悩したことを、ある患者は妻子を残していく無念さを、ある親は先立つ幼い我が子との天国での再会の願いを、ある患者はついに神に出会える喜びを分かち合った。残された時の中、彼らは問い続け、気づき、受容する。私は傍でその過程に寄り添い、時に支え、その瞬間を共に生きる。ある時は感情任せの荒い言葉を受け止め、ある時は音楽の中で表現された言葉にならないメロディーに音楽で共感し、またある時は無言で涙を流し合うこともあった。目の前のその人々に対し、自身がどう在るべきかが問われる実には人間的な行為である。人と人が互いに成長し合う『共同体』、それはケアの核なのかもしれないと気づかされた。

国際中学校・高等学校

「同志社」との出会い

宗教科教諭 西原 にしはら ももこ

私の受け持っている高校3年生の授業では出エジプト記「モーセの召命」を通して自分の人生やアイデンティティについて考える単元がある。授業準備の段階で担当者自身の人生についても振り返り、そのたびに同志社との出会いがなければ今の自分はいなかったと再認識させられるのである。

今でこそキリスト者としての歩みを与えられているが、クリスチャンホームの生まれでない私が聖書に出会ったきっかけは女子中学校に入学したことである。祖母が女子大音楽科出身だったこともあり、大学の音楽科入学を志していた。しかし、中高時代の聖歌隊での活動、毎朝の礼拝、クリスマスページェント、聖書の授業を通してキリスト教に興味を持ち始めた。そして高校3年生の8月に全国同信伝道会（同志社大学神学部・研究科出身の牧師・伝道師などで構成された団体）主催のキャンプに参加し、神学部の魅力を感じたため、急遽進路変更をし、神学部に入學する

こととなる。

1年生の時はやっと自由を与えられたという解放感から自分の好きなことをし、趣味に没頭していた。自分はこのままで良いのだろうかと考え始めた2年生の秋ごろから進路について悩むようになり、一応教員免許を取得しておくかという安易な考えのもとに勉強にも力を入れ始めた。3年生になり、周りの多くの学生と同じように就職活動をし、卒業と同時に一般就職すると思い込んでいた矢先、(色々なことが重なり)母校での聖書科講師の道を与えられた。歌にしか興味のなかった私が、まさか教員になるなんて、と当時は周りの人たちに驚かれた。

これまでの歩みを振り返るとき、自分がこうだ!と想った人生をほとんど描けなかった。しかし多くのターニングポイントの中で、人との出会いが与えられ、周りの人に支えられて生きてきたと思わされる。まもなく「同志社」に関わって20年目を迎えようとしている。生徒たちと関わっていると毎日思いがけないことの連続だが、「今の自分も嫌いじゃないな」と思う今日この頃である。